

第1章 事業の総括評価



I 趣旨

日本・中国青年親善交流事業は、昭和54年度に開始され、本年度は37回目の実施となった。

本事業は、日本と中国の青年相互の理解と友好の促進を図ることを目的とし、日本政府と中国政府の共同事業として名称のとおり両国の友好の象徴として実施しているものである。

また、日本青年の育成の観点から、内閣府青年国際交流事業の共通の目的は、「国際社会の各分野でリーダーシップを発揮し、社会に貢献する青年を育成する」ことであり、事業参加によりコミュニケーション力や異文化対応力等の能力向上が図られることをねらいとしている。

以上の目的を達成するために、日本及び中国の双方において、プログラムの組立てに際しては十分な意見交換及び要望を出し合い取り組んでいる。プログラム内容

は、国家及び地方行政レベルでの表敬訪問、その時々々のテーマを選定してのディスカッションプログラム、首都に加え複数の地方都市への訪問等、人的交流の重視を基本としつつ、毎年見直している。

本事業の成果を測るため、日本参加青年及び中国招へい青年の全員を対象として、事業終了時にアンケート評価を行うとともに、日本参加青年に対しては、事前研修及び帰国後研修時に自己評価の変化について比較調査を行った。

事業終了時のアンケート評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。日本青年の能力向上に関する自己評価の比較調査については、他の調査との比較の観点から6段階評価（評価の高い方から6～1）によるものとした。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「第4章 資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

① 日本と交流相手国の相互理解の促進

<日本参加青年>

「本事業を通じて、あなたと中国の人々との相互理解が深まったと思いますか。」との問いに対して、5段階評価の3（ある程度深まったと思う）以上をつけた日本参加青年は、84%だった。

<中国招へい青年>

中国招へい青年に対する「あなたと日本の人々との相互理解が深まったと思いますか。」との問いには、参加青年の全員が5段階評価の4（どちらかと言えば思う）以上とし、5とした者が93%と、極めて高い評価であった。なお、事業に参加した動機についての問（複数回答可）に対し、29名中16名が「日本に興味を抱いたため」と回答していることから、日本への関心が高かったことがうかがわれる。

② 日本と中国の友好の促進

<日本参加青年>

「本事業を通じて、あなたと中国の人々との友好が深まったと思いますか。」との問いに対して、5段階評価の3（ある程度深まったと思う）以上とした日本参加青年は全員だった。

なお、事業に参加した動機についての問い（複数回答可）に対して、25名中19名が「中国に興味を抱いたため」と回答していることから、中国への関心が高かったことがうかがわれる。

<中国招へい青年>

中国招へい青年全員が、「あなたと日本の人々との友好が深まったと思いますか。」との問いに対し、5段階評価の4（どちらかと言えば思う）以上、その内5をつけた者が93%と、極めて高い評価が得られた。

③ プログラムへの満足度

<日本参加青年>

訪問国プログラムの内容についての全体評価は、3（ある程度よかった）以上の評価が全員であり、4（良かった）以上は84%と、高い評価であった。各プログラ

ムの評価では、特に、「地元青年との交流プログラム」への評価は、全員が3以上であり、80%が4（良かった）以上あった。

<中国招へい青年>

招へいプログラムの内容についての全体評価は、全員が4以上であり、5（大変良かった）が86%と、高評価であった。

東京プログラムは、いずれの訪問先も体験や説明に関し4（良かった）以上が90%を超える非常に高い評価だった。

人的交流としての、「公務員」「ニュー・メディア」「青

少年団体」の3テーマによる「業種別交流会」に対する評価は、4（良かった）以上が86%であり、その中でも5（大変良かった）が72%と、満足度が高く、日本人との交流が十分に行われたと評価している。また、参加青年それぞれが興味を持つ分野について理解が深められたことが、高評価につながったと考えられる。

地方プログラムは、群馬県及び函館市のいずれも高評価であった。例年同様ホームステイは人気が高く、また日本文化を直接に体験できたプログラムの満足度が高かった。

2. 日本参加青年の成長

① 日本参加青年についての自己評価の向上度

本事業の目的の一つである、日本青年の自己評価の向上について、項目別に具体的に検証したところ、次のような結果になった。

「コミュニケーション能力」については、

4.0から4.6となり、0.6ポイントの増。

「異文化に対応する能力」については、

4.5から5.2となり、0.7ポイントの増。

「チャレンジ精神」については、

4.0から4.5となり、0.5ポイントの増。

「問題解決能力」については、

4.0から4.3となり、0.3ポイントの増。

「企画力」については、

3.5から3.9となり、0.4ポイントの増。

「マネジメント力」については、

3.5から3.8となり、0.3ポイントの増。

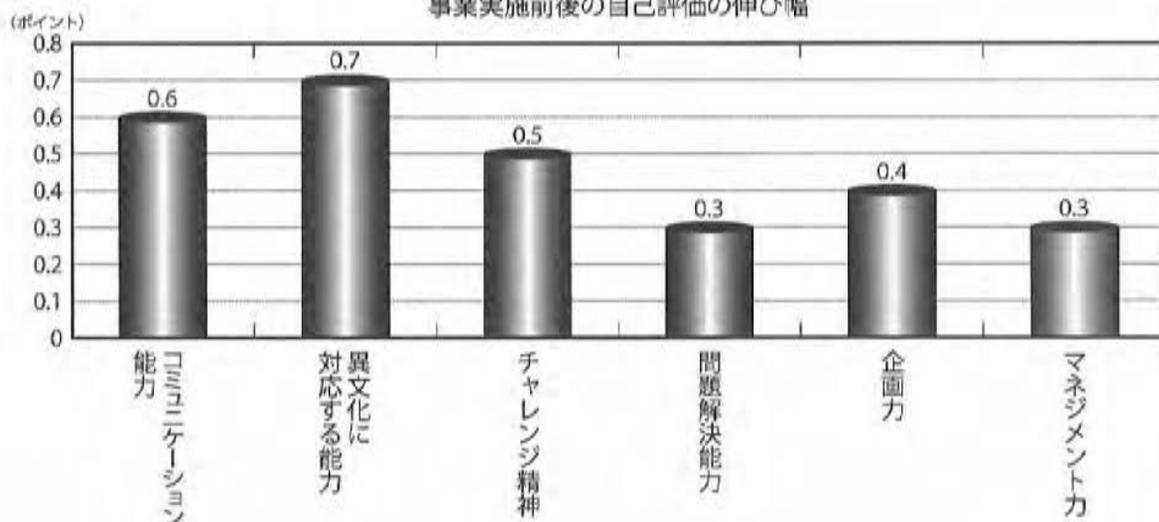
（ポイント数については、小数点第2位以下四捨五入）

伸び幅が大きかったのは、「コミュニケーション能力」、「異文化に対応する能力」であるが、その理由としては、プログラムを通し、多様な場所への訪問や多彩な人々との交流や大学生とのディスカッション等の実践的経験ができたこと、日本青年代表としての表敬訪問、テーマに沿った課題別施設訪問等の普段体験することができない貴重な経験ができたことによるものであると考察できる。

昨年と比較して比較的伸び幅がみられた項目は、「チャレンジ精神」「企画力」であるが、今回の中国派遣の事前研修は、昨年の4日間から従来の6日間に日程が確保されたので、より入念な準備が可能になり、伸び幅が拡大したのではないかと推測できる。

「マネジメント力」については、プログラムは基本的には中国政府により作成されるため、自らで構想構築できないといった背景もあるが、事前研修に「マネジメント力」向上につながるような内容を組み入れることなどが考えられる。

事業実施前後の自己評価の伸び幅



3. 中国招へい青年の日本に対する印象の変化及び成果

- ①「本事業に参加して日本に対する印象は変わりましたか。」との問いに対しては、4（どちらかと言えば良くなった）以上は93%、5（良くなった）は53%と、極めて高い評価であった。
- ②「この事業からどのような成果を得ましたか。」の問い（複数回答可）には、29名中25名が「日本と日本の文化について理解を深めることができた」を選択し、

29名中16名が「多くの友人を得ることができた」を選択した。

- ③「この事業はあなたの将来に役立つと思いますか。」の問いにも、全員が4（どちらかといえば思う）以上の評価であり、5（役立つと思う）を20名が選択した。この結果からも、中国招へい青年が事業に参加したことで日本に対して良い印象を持つようになり、この交流が中国招へい青年の認識を変える一助になったことがわかる。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

<日本参加青年>

「事業全体を事前研修及び出発前、帰国後研修も含めて、どのように総合評価しますか。」との問いに対して、全員が5段階評価の3（ある程度良かった）以上をつけ、そのうち4「良かった」が52%、5「大変良かった」が36%であった。

<中国招へい青年>

「この事業をどのように総合評価しますか。」という問いに対して、全員が5段階評価の3（ある程度良かった）以上をつけ、そのうち、「大変良かった」が86%であった。

日本参加青年、中国招へい青年ともに、5段階評価の4以上の割合が85%を超え、高い評価を得たことが分かる。

日本参加青年からは「観光や留学では訪問できないような場所を訪れ、様々な立場の方に出会えて良かった。」

「日中間の問題も良く理解できた。」「自発的に行動せざるを得ない環境に身をおき、自らを成長させることができた。」、中国招へい青年からは「日本と日本の文化に対して新しい認識を得て、これまでと考え方が変わった。」「日本社会の文化の高さ、秩序、礼儀を理解した。」「日本人が、中国についても理解を深めようとしていることを理解した。」などのコメントが寄せられ、青年との交流や産業、文化、教育施設訪問等、各種の活動を行うことにより、両国青年相互の理解と友好の促進を図ることができたと評価している。

以上の通り、本事業の目的である「日本と中国の相互理解と友好の促進」に対しては、日本と中国の参加青年の双方から、プログラムが、お互いの国への理解を深化させるために大きな効果があるとの評価を受けており、本年度の事業も十分な成果を取めたと評価している。

また、日本参加青年の自己評価、すなわち能力向上の観点からは、昨年よりも、「異文化対応能力」や「企画力」について向上の幅が大きい傾向が見られ、事前研修を昨年の3泊4日から従来の5泊6日としたことにより、準備の取組に余裕ができたことによる効果ではないかと評価している。